持ち帰り

令和 8 年度山口県立大学 国際文化学部情報社会学科
一般選抜（前期日程）「小論文」問題用紙

日本における価値観の転換について記述した以下の文章を読み、次の問いに答えなさい。

国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」では、日本の人口は 2048 年に 1 億人を切り、2110 年には 5000 万人を下回るという推計、出生中位(死亡中位推計「日本の将来推計人口〈平成 24 年 1 月推計〉」)が出されています。人口が都市に移動することは、人口減少を加速化する要因にもなります。

こうして人口減少が進行すれば地方衰退が、さらに進むように思います。それは単なる人口減少にとどまらず、地方の経済や社会を衰退させることに加えて、地方で育まれてきた独自の伝統や文化、日本の原風景とも言える里地や里山も、場合によっては消滅させる懸念があります。自然は人がいなくてもそのままで維持できると思われるかもしれませんが、棚田など日本の里地里山の美しさは、私たちの先祖が長年、自然に手を加えて育んできたものです。

田んぼに水を運ぶ用水路、山菜やキノコがとれる雑木林などはすべて私たちの先祖が人の手で作り上げてきたものです。限界集落が問題になるのは、こうした里地里山を守る最前線が消滅しかかっていることです。

こうした地方の里地里山は、単に美しい風景の田舎というだけでなく、大事な食料生産の拠点です。そして日本の国土の面積の 7 割を占める森林は、水源を守る機能、保水機能、防災機能、地球温暖化防止機能など、多面的な機能も果たしています。地方消滅はこうした日本の国土がもつ機能と価値を大きく損ねることになるのです。こうした機能は経済的に評価されにくいので忘れられがちになりますが、日本の重要な資産です。

（中略）

どうも今の日本では、気がつかないうちに価値観の転換が起き始めているようです。この価値観が変化しつつあるという兆しは、10 年ほど前に世界遺産の白川郷を訪れたときから感じていました。白川郷には車で出かけたのですが、目的地が近づくにつれ、周囲がどんどん寂れ、山深くなっていき、たまにトタン屋根の古い集落が点在するだけなのです。

「本当にこんなに何もなくて大丈夫？　この先に世界遺産があるの？」と、不安に感じはじめたころに、白川郷が目の前に現れました。

白川郷で話を聞いてみると、実は途中に見えたみすぼらしい集落も、昔は白川郷と同様の合掌造りだったとのこと。しかし、手前の集落はアクセスが良かったので、戦後、経済的に豊かになり、近代的と言われる西洋風の物資がどんどん流入してきたそうです。そこで「古臭い合掌造りはやめて近代化だ！」と、近代的なピカピカのトタン屋根の文化的な家にしたのでした。しかし、30 年も経つと、トタン屋根の集落はみすぼらしくなり、古臭かった合掌造りは世界遺産として脚光を浴びるようになったのでした。

当時、白川郷の人は、恥ずかしくて「白川郷出身だ」と言えなかったそうです。「いまだに古臭い合掌造り」と言われたからでした。

ここから浮かび上がるのは、今の経済の尺度にはない、時代を経ないとわからない価値存在です。それは、目先の利益という目に見える価値につながらないため、経済や金融を司る人たちには、認識されていない価値なのです。

しかし、数値に落とし込めない価値を価値として認められる人たちが、確実に生まれてきています。そうした価値の転機が始まった背景には、地球環境の問題、世界規模で急速に広がっている所得格差の問題、人類の持続可能性（サステナビリティ）の課題などがあるのではないでしょうか。地球が無限に広がる舞台で永遠の経済成長が可能ならともかく、地球は一つしかなく、70 億人の人間がひしめき合い、そこに大きな格差があり、人々の不安が増している。そういう状況では、それぞれが成長のために弱肉強食の競争をしていれば共倒れです。そうではなく、いかにみんなが平和で心豊かに生きていけるかを問わなければいけません。

つまり、これからは経済成長ではなく、70 億人が共生できるかを価値としなければいけません。実際、I ターンした若者たちは、この新たな価値基準を体現しているとも言えます。

これをもっと大きな経済のしくみに反映するためには、金融にもそれを反映させることが大事です。そうなると投資の価値基準も変化せざるをえません。企業の利益、国の GDP などの成長を評価する従来の尺度だけでは不十分です。その企業や国、地方は成長するのかを評価するのではなく、その国や地方、企業は持続可能か？　目を向ける発想の転換が求められます。

そのためには、自然や地域の資源を活用する地域創生、地球規模の環境問題の解決、貧富の格差是正、人権の尊重などのサステナビリティに向けた取り組みが、企業活動や地域の経済のしくみにビルトインされていることが必要です。

持ち帰り

（出典：河口真理子著,『ソーシャルファイナンスの教科書　―「社会」のために「あなたのお金」が働くということ』, 生産性出版, 2015, 167～172 頁より。出題の都合で原文の一部を改変した。）

問１　下線部「時代を経ないとわからない価値存在」について本文中の言葉を用いて **200** 字以内で説明しなさい。

問２　波線部「数値に落とし込めない価値」を **10** 年後にも残し続けるためには、今、どのような取組が必要でしょうか。「数値に落とし込めない価値」の具体例を **1** 点示した上で、**10** 年後にもその価値を残し続ける方策について、自身の経験も交えながら **600** 字以内で記述しなさい。

令和８年度 山口県立大学 国際文化学部 情報社会学科
一般選抜（前期日程）「小論文」出題意図と評価基準

出題採点委員

（１）出題意図

著者は、近年、経済的利益ばかりを追求していた近代の合理的価値観から、日本の地方で見られる里山の原風景、伝統文化など「経済的に評価されにくい」価値存在を再評価する兆しがあることを指摘し、今後は、様々な場面で価値基準そのものを見直す必要があるだろう、と予見している。

この議論を通して、人々の「価値観」の特性や重要性を捉え直すとともに、それが時代とともに変容する存在であること、加えて、新しい視点からの「発想の転換」を促す要因ともなり得るという視座を提供している。

以上から、本小論文では、身近な環境に存在する「数値に落とし込めない価値」にも目を向けつつ、これが今後の社会形成にどのように関わるのかを多面的視点かつ想像力をもって記述されることを期待したい。

河口真理子著，『ソーシャルファイナンスの教科書　―「社会」のために「あなたのお金」が働くということ』，生産性出版，2015，167～172 頁より